

2019. 9. 15. 聖霊降臨節第15主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書5章27-32節

『わたしに従いなさい』

そのとき主イエスは一人の人をじっと見つめておられた。目を留めておられた。見つめられていた方は最初は気づかなかったとして、ある時から気づいたのではないか。なぜなら、普段は感じない視線だから。主イエスはその人を見つめられた。

一人の徴税人が収税所に座っていました。税金を徴収するのが彼の仕事です。徴税人はユダヤ社会では『罪人』という烙印を押されていました。なぜかと言えば、徴税人はユダヤを当時支配していたローマ帝国の手先になって働くものだったからです。徴税人はローマ帝国が税金を徴収する下請けの下請けでした。ルカに出てくるザアカイ、彼はその下請けを束ねる人だったのではないかと、言われていますが、ここに出てくる徴税人はまさに下請けの一人。下請けといっても仕事上ユダヤ人以外の外国人との接触もあり、それもまた、「汚れている」理由でした。おまけに徴税人はしばしば税を余分に徴収し懐に入れるという悪いことをしていましたから、彼らは『罪人』の烙印を押されていました。罪人というのは、たんなる犯罪者ということとは違います。罪人は先週の重い皮膚病の人の時に申し上げたように、ユダヤ社会の中で、神の恵みや救いの外に置かれた人、はじき出された人、ということなのです。その結果誰も徴税人に声をかける人などいなかった。仕事上の最低限の話はしたでしょうが、それ以外は一切ない。罪人と必要以上に喋れば、しゃべった相手も穢れるのですから。主イエスが見つめていたのはその徴税人であるレビでした。そして主イエスはレビに呼びかけられた。「わたしに従いなさい」。

誰からも声をかけられることのない、その人に向かって主は呼びかけたのです。それは時候の挨拶ではない。適当な話をして、はいさようなら、と言ったのではない。「わたしに従いなさい」とは、「わたしと一緒に歩んでいこう」、ということです。突然すぎるほど突然です。ところがにもかかわらず、レビはその呼びかけに直ちに答えているのです。

呼びかけられた側からいえば、突然すぎる呼びかけだ、とも思うのですが、呼びかけてくださった主イエスのことを思うと、わたしたちはあることに気づきます。それは、主イエス・キリストは、まさにこのために地上に来られたのではないかと、いうことで

す。この同じ福音書に出てくるいなくなった一匹の羊のたとえ、放蕩息子のたとえ、それはみな、いなくなり見失われたものを見出して喜ぶ話でした。罪人と呼ばれ、汚れたもの呼ばわれされ、嫌われはじき出されている人、その人に向かって、わたしと共に歩いていこう、と言われるキリスト。これはキリストの御生涯ではないか、とあらためて思うのです。これは罪人を負う十字架ではないか、と思うのです。

レビは驚き、喜び、うれしかった。「彼は何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った」何もかも捨てて、という言葉は何もかも置いたままで、残したままで、という言葉で、何もかも中断して、立ち上がりイエスに従ったというのです。

レビは、誰からも声をかけてもらうことのない存在でした。ですが、人はいったい、ほんとうに自分に向かって呼びかける声を聞いているのか。忙しい仕事に追われ、多くの人に囲まれている人、だからといってその人は自分に呼びかける声を聞いているのか。確かにたくさんの声には囲まれてはいる。仕事上立場上、自分に何かを求める声は溢れている。だがそれが本当に自分に呼びかけている声かというと、わからない。本当に自分を目指している声なのか、わからない。仕事上の役割や、働きに向けられた声なのかもしれない。仕事を降りれば、役割を終えたら、聞こえなくなる声かもしれない。本当の本当のところ、このわたしに関心を持つ人などどこにもいないのかもしれない。自分を目指している声はわたしにあるのか。

レビはその中で、自分を目指す声を聞いたのです。驚くような声を聞いた。「わたしと一緒に歩いていこう」それは、レビの腹の底に響く声だった。腹の底に響く声で人は立ち上がるのです。頭で聞いただけでは立ち上がれない。

彼は自分の家でイエスのために盛大な宴会を催しました。そこには徴税人たち、罪人という烙印を押された者たちも大勢来て、一緒に席について食卓を囲みました。これは当時の社会の中で異様な光景でした。『罪人』と呼ばれる人々が集まり宴会をし、そこに、他の人々も加わって食事をしているのですから。

その様子をうかがっていたファリサイ派や、律法学者たちは、とてもとても驚いたことと思います。彼らは罪人や汚れたものから身を離すこと、近寄らないこと、接触しないことで、自分たちの清さを保っていたからです。それで自分たちは神に守られている、神の保護の中にあると思いつけていたのです。だがこのイエスという人は、自分の方からわざわざ徴税人に近づき、声をかけ、挙句その徴税人の家の宴会にまで行き、そこでほかの罪人たちと同席している。それは言うまでもなくイエス自身も穢

れること、罪人と呼ばれることになるのです。この聖書箇所で気づかされることの一つは、「わたしに従いなさい」と呼びかけた主イエスが、『罪人』と呼ばれたレビについていき、その罪人の群れに加わっていることです。弟子たちを連れて、罪人と食卓を囲むため、ご自分の方からついていかれていることです。これこそ主イエスの御生涯と言ってもいいことです。ファリサイ派の人々は主イエスの弟子たちに尋ねました。「なぜあなたたちは、つまりあなたたちの師である主イエスは徴税人や罪人などと一緒に食事をするのか。」

それを聞いた主イエスは彼に向かってこう答えました。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」

この主イエスの発言は、あえていえば、わたしは正しい人を招かない、と言っておられるということです。正しい人はわたしと一緒に歩くことができない、そういつておられるのです。大変逆説的な表現です。ファリサイ派も律法学者も真面目で立派な人として人々から尊敬されるたちでした。律法にも忠実だった。その彼らの真面目さと正しさが徴税人を受け入れないのです。

しかし主イエスは徴税人レビを見つめ、受け入れ、呼びかけるのです。問題は、ファリサイ派と律法学者がこの主イエスのなさったことの豊かさ大きさ、信実、愛を見ようとしていないことです。見て見ぬふりをしているということです。本当はこの主イエスの愛がなければ人間は行き詰まってしまうのに、いやもう行き詰っているのに、そのことに気づこうともしないで、自分の正しさにしがみつき自分の正しさを握りしめて、逆に主イエスを糾弾しているその愚かさ、それが人間の中にあるものです。

「罪人を招いて悔い改めさせるためである。」そう主イエスはおっしゃったのです。罪人とは誰のことか、という問いに対してある人はこう答えました。「罪人とは突き詰めていえばキリスト以外には受け入れてもらえない人のことだ。」

あらためて考えてみてください。福音書に登場する人の中で、徴税人や重い病気に苦しんできた人たちは、他の誰よりも自分がキリスト以外には受け入れてもらえないことを経験してきた人たちだった。罪人だという烙印を押されて、人々から払いのけられて、誰も自分に声をかけてくれない、この人たちは、行き場がない人たち。キリストはこの人を断固として受け入れる、呼びかける、一緒に歩いていこうと声をかける。そのことの有り難さを知らされたのがレビだったのです。だからこそ、このわたしも救われる。このわたしにも呼びかけがあるのです。

本当をいえば、罪人でない人などいない。正しい人などいない。しかも人間の罪

は根深く、自分の正しさで神をも払いのけようとするほどの傲慢がわたしたちの罪の中にあるのです。しかしレビはキリストが呼びかける声の有り難さがわかり、キリストがこんな自分を受け入れてくださって一緒に歩こうという呼びかけの有り難さがわかったのです。

わたしのこともキリストは見つめてくださっておられて、わたしにもキリストは呼びかけてくださっている。その声に聞けるわたしにこれからもしてください、と祈れるわたしでありたいし、聞いて立ち上がっていくわたしにしてください、と祈るわたしでありたいと思うのです。

D a t a : 聖霊降臨節第15主日礼拝式説教
讃美 : 前448、後507
新生教会礼拝堂